

レアメタル再利用促進

携帯販売時に説明義務

経産省

経産省は13日までに、携帯するレアメタルの安定供給を図るため、携帯電話の販売店に顧客へのリサイクル情報の説明を義務付けるほか、製造企業にはレアメタルの二種であるパラジウムやプラチナを含む金属

は、細かな加工が可能で携帯電話の微細部品の材料に使われているほか、充電器などの接続部には金や銀などが多く含まれている。良質な金鉱石1万トに含まれる金は50g程度だが、携帯電話1万台を回収すれば200〜300gの金を再利用できるといふ。しかし、個人情報を入力した携帯電話のリサイクルには消費者の抵抗感が強く、回収台数は2006年度で約600万台と出荷台数の約12%にとどまっている。

改正案は携帯電話の販売店に、1台に含まれるレアメタルの量や個人情報の流出防止策を購入者に説明することを義務付ける。リサイクルへの抵抗感を払拭し、資源の有効利用に理解を促めることで、回収台数を大幅に引き上げるためだ。

また、製造工程で廃棄されるレアメタルの量を減らすため、環境会計の一つである「マテリアルフローコスト会計(MFCA)」の導入を促す。MFCAは企業に原材料費などの製造コストを、製品と製造過程で発生した廃棄物に分けて表示する。無駄

になっていて原材料の量を金額で明示するため、企業に廃棄物削減を促す効果が期待できる。レアメタルは電子製品の増加やハイテク化によって需要が増大。一方でロシアや中国などに限られている産出国が、輸出規制を始めたことから価格が高騰。プラチナの場合、07年5月に1kg約4万1500円(約452万円)となり、5年前の2・5倍に上昇した。このため経産省は外交による資源獲得に加え、リサイクル推進策導入が必要だと判断した。



中国・アジア

レアメタル開発 “脱中国”へ

争奪戦激化で「レアメタル(希少金属)パニック」とも呼ばれる事態が世界中で起きている。最大のレアメタル産出国、中国が国内需要の高まりを受け輸出を規制し、外交カードに使う姿勢を強め、日本は中央アジアやアフリカで代替資源の確保を迫られている。一方で製造過程の環境破壊も深刻化。レアメタルビジネスに30年あまり従事してきた中村繁夫アドバンストマテリアルジャパン社長は、「今後、中国への依存から脱却する動きが進むが、開発には環境保護の視点も不可欠」と指摘する。(藤沢志穂子)



中央アジアに商機あり

半を中国からの輸入に依存している日本は昨年初め、中国

アドバンストマテリアルジャパン社長

中村 繁夫氏



《なかむら・しげお》静岡大学大学院修士課程修了、1974年入社。化学部品、機能製品部、機械金属資源部、リアル部などで中国、ロシア、中央アジアを中心に、30年あまりにわたりレアメタルの開発や輸入に従事。2003年アドバンストマテリアル社長、04年にMBDO(経営陣による自社買収)で経営権を取得した。60歳。京都府出身。

レアメタルの供給が逼迫し、価格高騰が続いている。「ハイテク製品の製造に欠かせないレアメタルの市場規模は、この3〜4年で急拡大した。レアメタルは個別の市場規模が小さいので、相場は猫の目が変わるように乱高下する。例えばフラットパネルディスプレイ(FPD)に使われるインジウム。ここ3カ月ほどは暴落しているが、大

が国内需要増加に伴う輸出規制を行った影響で供給を脅かされた」

「いわゆる『デジタル革命』が、レアメタル需要に拍車をかけた

「この年末年始にインドを旅したが、いわゆるホームレスの人でさえ携帯電話を持っていた。レアメタルのおかげで携帯電話やデジタルカメラ、液晶ディスプレイなど新

しい機器が安価で大量生産できるようになり、貧富の差にとらわれず情報が入手できる時代になった。巨大な『箱』だった携帯電話が軽量化でき、省エネ効果も上がった。一方でレアメタル採掘と商品化では、中国における工場排水など環境破壊が深刻だ」

「その中国が輸出規制を加速している

「希土類、インジウム、タンクステン、アンチモン、モリブデンなどを有する資源大国で、供給国から消費国への変化が予想以上に早かった。

例えば希土類の場合、2006年に輸出税をかけた開始したが、今年の1月1日からは25%(従来は10%)に引き上げるなど対応が極端だ。将来は禁輸もあり得るが、ロシアがエネルギーを外交カードに使っているように、中国もやがて、レアメタルを資源外交の切り札に利用するようになるのではないかと

「日本はどう中国と付き合うべきか

「中国は環境問題に配慮せざるを得ない状況になっている。日本は1970年代から培った省エネやリサイクルの

技術を無償供与し、共同でレアメタル開発を進めるといった柔軟な戦略が必要だ。『技術をまねられるだけ』と懸念せず、もっと進んだ技術を開発すればよい」

「中国に代わる供給元として、中央アジアが脚光を浴びている

「未開発資源は中国より多いかもしれない。キルギスは白物家電にも使われるアンチモンや希土類が豊富で、当社はパキエフ大統領が昨年11月に来日した際、レアメタル開発協力に関する覚書を締結した。中央アジアでも有数の大

資源国であるカザフスタンとはタンタル、タングステン、ニオブなどの開発を進めているが、タンクステン、モリブデン、希土類の鉱山開発の計画もある。ウズベキスタンやアゼルバイジャンでも投資機会をうかがっており、今後、レアメタルの開発投資で、脱中国の流れが加速する可能性が高い

「これらの地域は、輸送路に難があり、進出に慎重な企業も多い

「鉄道輸送が主軸で、確かに80年代末までの旧ソ連時代は整備されておらず、輸送品が紛失することもあった。だが最近はかなり改善されており、中央アジアから上海までの輸送日数は約10日間に短縮した。すでにカナダや豪州の投資会社が進出しており、日本は出遅れている」

「開発と環境保護の兼ね合いは

「価格高騰により、新たな地域での探鉱や日本国内での鉱山開拓、代替材料の開発も視野に入る。一方で、レアメタル開発は環境を悪化させる矛盾を抱えており、どうバランスを取るかが今後の課題。有効な資源は地球からの贈り物であり、地球規模で環境保護を考える『フナネイズム(地球主義者)』の視点が大切だ」